

難波西鶴と

海の道

【9】

森田 雅也

前回の人魚伝説に続き、西鶴作「武道伝来記」(貞享4(1687)年刊)巻二の四「命とらるる人魚の海」の話です。

松前藩の海岸を取り締まる奉行に中堂金内という人がいました。村々を警戒している

と、鯨川(未詳)という入り海で夕暮れ時となり、小舟に乗って帰路についたところ、浜から1里も行ったところで、白波がにわか立ち騒ぎ、5色の水玉がたぐさん飛び散り、波が2つに割れ、そこから「人魚」が現れました。

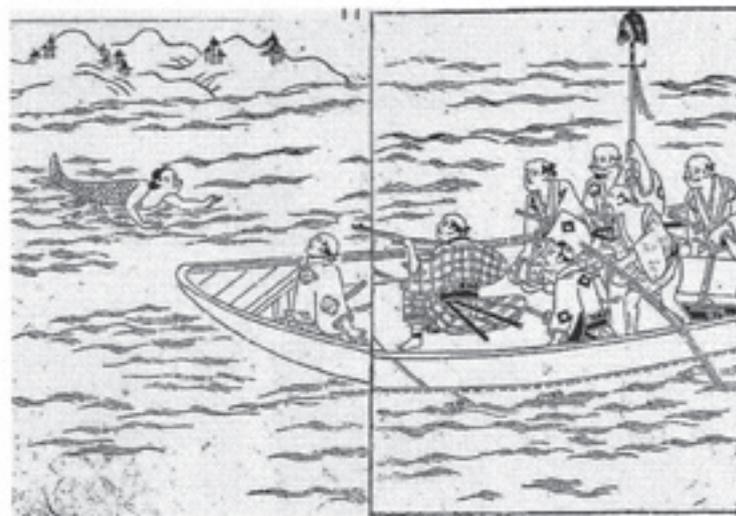
この光景。ウルトラマンか何かの怪獣登場のシーンとそっくりで

すね。いや、逆にここから取ったのかもしれないが。

いずれにせよ、船頭たちは驚いて気絶してしまいます。金内は果敢にも半弓(小型の弓)を取り出し、矢を放ちます。矢は人魚に当たった手応えがあり、そのまま、波間に消えていきます。

やがて高波も静まり、一同は岸に着きますが、金内は、その足で松前城に登城し、家老に職務報告とともにこの一件も話します。重臣誰もが金内の武勇と剛胆さに感心し、明日にも殿にこの手柄を申し上げ、お褒めの言葉を賜ろうとなりますが、どこにでもひねくれ者はいるものです。青崎百石衛門という

武家の悲劇は人魚のたたり？



「武道伝来記」巻二の四挿絵。「人魚」を射る金内。なぜか、半弓ではなく、鉄砲で射ている(関西学院大図書館所蔵)

部文学言語学教授)

(関西学院大学文学

御留守番役は「はっきり見たものでない限り、殿のお耳には入れない方がよい。魚にはヒレがあつてすばしいものだ。弓矢など当たるはずがない。それによる世に化け物や不思議話などないものだ。狼の頭は赤く、犬の足は4本に決まっています」と両高に非難しました。

の跡を追って死のうとしますが、親の敵を捨て置くのかと諭され、助太刀を得て、青崎百石衛門を見事打ち果たします。

重臣の中から、世のことで不思議はいくらでもありますが、結果が得られず失意のうちに病死しました。

皮肉にも、その後すぐに、金内の矢の刺された人魚の死骸が発見されたという報が入り、金内の無念が晴れますが、武家ゆえの悲劇。これも人魚のたたりなのでしょうか？

「命とらるる人魚の海」